

*books reviews*  
**ブックレビュー**

---



南国への旅がもたらす魂の浄化の物語

## 『ミノタウロスの誘惑』

アナイス・ニン 著 大野朝子 訳

評者 大野朝子\*



水声社 2010年

アナイス・ニン（1903-1977）は、作家として成長しようとし、切磋琢磨する過程で生じた心の葛藤を、鋭い観察眼を生かして綴った *The Diary of Anais Nin Vol.1*（1966）のなかで、「わたし」の心は「砕けた鏡のようだ」と語っている。小説や日記のなかでニンは繰り返し「わたし」という意識の実態を捉えるべく、自らを実験台としてひたすら人間の内面の世界に関心に向け、こころの目を育てようとしていた。ニンはときにフロイトやユングの理論を学び、援用しながら、「わたし」を解体しては再構築し、独自の作品を仕上げているが、そこには、掘り返せば掘り返すほど未知の部分につき当たり、自分と他者の境界がわからなくなる、という複雑な自意識が表現されている。たとえばルネ・ジラルは、欲望は他者の欲望を模倣することによって発生する、と説いたが、「砕けた鏡」という表現は、無意識という混沌の世界の発見に伴う困惑の表れである。

しかし、たとえばシュールレアリズムの芸術作品にみられるように、無意識は創作者にとって豊穡の海でもあり、シンボルの宝庫だった。ニンは生涯「わたし」の解体を試み、「わたし」にこだわり続けた作家であるが、そこにみられるのは単なるナルシズムではない。「わたし」はヤヌスの鏡のような多面体で、ときに自分のまったく知らない姿を見せてくれる。ニンは社会的な役割を担う「わたし」を重苦しく感じ、そのような意識からの解放を強く望んでいた。創作におけるニンの視点は性や国籍、階級など、さまざまな

\* 東北文化学園大学総合政策学部専任講師

境界を越えた人間のコミュニケーションの難しさと奥深さに向けられることが多く、彼女はその文学において他者との和解、共感の方法を探っていたともいえる。その例として、ニンは日記に、創作の目的は他者との「共感」を得るためだ、と明記している。さらに、彼女は作品のなかで、「自己」と「他者」がせめぎ合い、境界を侵犯し合うような濃密なコミュニケーションへの渴望を描いている。

1961年にスワロー・プレスより出版された『ミノタウロスの誘惑』のタイトルにある「ミノタウロス」とはギリシャ神話に登場する怪獣であるが、ニンは女性に良妻賢母の役割を強いる当時の社会的な抑圧下で、本当の自分の欲望を押し込め、隠して生きざるをえない主人公の苦境を、ミノタウロスの比喩を使って表現している。作品の内容は以下の通りである。

主人公のリリアン・ベイは30歳で、職業はジャズ・ピアニストである。物語はリリアンが演奏のため、ゴルコンダ（メキシコのリゾート地アカプルコをモデルにしている）の空港に到着する場面から始まる。リリアンは現地でさまざまな人々と出会い、旅を通して新しい体験を重ねて行くが、胸のなかにはモヤモヤとしたわだかまりがあり、リゾートでの生活を楽しむことができない。ニューヨークに残してきた夫のラリーとの不和や、不幸な子供時代の思い出に囚われているのである。その様子を見て、偶然出会った現地の医師エルナンデスは悩みを聞き出そうとするが、リリアンは打ち解けた会話を頑なに拒否する。しばらくして、リリアンがやっと本心を打ち明けようとし、エルナンデスの家に向かうと、彼は事故で突然この世を去ってしまう。ショックを受けたリリアンは、ますます自分の世界に引きこもりがちになり、心のなかに棲む（もう一人の自分）に向き合わざるをえなくなる。その結果、リリアンはラリーとのコミュニケーションを阻んでいた原因に気づく。リリアンは今まで「自分らしく」生きてこなかったし、ラリーの本当の姿を見ることを拒否し続けてきた。見え透いた「演技」をやめ、本心を曝して本当の意味で向き合わなければ、関係は改善しない、と実感し、リリアンは人生をやり直すべく、夫と子供たちのところに戻って行く。

アナイス・ニンの作品はどちらかといえば小説よりも日記が有名であり、一般に小説は抽象性が高く、難解だと考えられている。しかし、『ミノタウロスの誘惑』は主題が明確で、ニンの小説のなかでは珍しく帰結部で主人公

の葛藤の終焉が暗示されている。『The Diary of Anais Nin Vol.5 (1974)』のなかで、ニンは「自分の内部にあって見えないもの、把握できないものを私たちは自分の外に投影する。私たちの生活の大部分は、もっと深いところにある自己と向き合うのを避けるための作り事にすぎない」と語っている。リリアンはメキシコの旅で、異国情緒と、ゆるやかな時間の流れに身を任せるうちに、心身が浄化され、解き放たれるのを感じ、自分と家族の関係を悪化させた原因である「作り事」が何であったかを知る。さらに、リリアンは日々の習慣のなかで知らぬ間に蓄積されていった独断や偏見を取り除き、「砕けた鏡」のような心を統合することに成功する。常に魂の有りようを追いかけてきた作家であるアナイス・ニンの手にかかると、ありふれたリゾート地への旅行も、さながら巡礼の旅のような様相を見せ、読後は心身が回復したような気分をリリアンとともに味わうことができる。

過去に矢川澄子や柄谷真佐子などの著名な作家によって紹介されてはいるが、ニンは日本ではまだ知名度がそれほど高いとはいえない。しかし、近年では、無削除版の日記『インセスト——アナイス・ニンの愛の日記』（杉崎和子訳 彩流社、2008年）の翻訳を皮切りに、『水声通信31号』（水声社、2009年）で特集が生まれ、長い間入手不可能だったテキストを元にした『人工の冬』（矢口裕子訳 水声社、2009年）が出版されるなど、じわじわと注目を集めている。

フランス生まれのアメリカ人で、音楽家を両親にもち、20代から30代にかけてパリで暮らし、さまざまなジャンルの芸術の世界にどっぷり浸りながら独自の感性を育てて行ったニンの作品には、繊細で優美で、はかない独自の世界が表現されている。60代を目前とした時期に執筆された『ミノタウロスの誘惑』は、円熟期の作家が見せる柔軟な人間観が表れた美しい作品である。